

「資本」概念の生成と展開に関する一考察

——テュルゴー学説の貢献とその足跡にみる問題点——

青山学院大学経済学科現代経済デザイン学科教授

中川辰洋

近代経済学研究の歴史をふり返るとき、ラテン語の“capitalis”を語源とする「資本 (capital)」という用語を、土地や労働とともに経済学の分析対象である市場経済ないし資本主義経済の主要概念として厳密に定義し、そのうえでそれが富の形成と分配という社会の基本的経済関係を形成する主要な担い手であることをはじめて体系的に明らかにしたのは、ひとえにアンヌ・ロベール・ジャック・テュルゴーの功績である。かれが 1766 年に著した『富の形成と分配に関する諸省察』(以下、『諸省察』と略記) にあって最も力を注いだ領域こそ、資本の理論とそれと関連する経済関係の分析であった。

実際、テュルゴーは 100 の小節からなる『諸省察』の「資本一般および貨幣収入」という一節で「資本の一般定式を」を導出してのち、後半のほとんどを資本の形成と蓄積、貨幣利子の問題への詳細な分析に費やしている。その意味からすれば、テュルゴーの『諸省察』は、「資本論」というほうがより適当かもしれない。もとより、それは単なる用語の問題に尽きるわけではない。テュルゴーの独創の賜^{たまもの}である資本理論の経済学の古典形成における多大の貢献をいうのであって、後世にたとえテュルゴーの名を冠することがなかったとしても、フランスのみならずヨーロッパ諸国に迎え入れられ、経済学研究の中に深く根を下ろす秀でた経済理論であったというところにある。

だが、それにもかかわらずテュルゴーの経済学の古典形成における貢献は長い間正当に評価されてこなかった。その最大のポイントは、資本理論それ自身に関する評価よりもむしろ、テュルゴーという「ずば抜けて秀でた男」(アンドレ・モルレ神父)の経済思想や経済学説の研究史における評価と位置づけにある。すなわちテュルゴーは、『経済表』によって不朽の名声を経済学の歴史にその名を刻むことになるフランソワ・ケネーを頂点する 18 世紀フランスの一大思想潮流——フィジオクラート派の有力メンバーであり、かれの業績はケネーの経済理論を継承・発展させたものであったが、そうした功績もかれと交流のあったアダム・スミスの経済理論を準備する「先駆的」業績にすぎないというのである。

テュルゴーがはたしてフィジオクラート派の有力メンバーであったかどうかは大いに異論のあるところであるが、少なくとも 18 世紀末から 19 世紀までの間、かれの友人でフィジオクラート派の領袖ピエール＝サミュエル・デュボンや、かれの衣鉢を継ぐ人間たちの手になるテュルゴー全集が、テュルゴーをケネーとかれを開祖とするフィジオクラート派の理論を継承・発展させた人物と思わせるよう編集されていたことは否定できないし、実際問題として多くの研究者をミスリードしてきたことは争えまい。

しかるにギュスターヴ・シェルが 1913 年から 10 年の歳月をかけて編集・出版したテュルギー全集は、そうしたフィジオクラート派のバイアスを取りのぞくうえでの功が大であった。それにまた、同じくシェルの手によるテュルギーやかれが生涯の「師」として敬愛したジャック＝クロード＝マリ・ヴァンサン（のちのグルネー公爵）の評伝などともあいまって、従来のグルネーやテュルギーの評価を一定程度修正することを可能とした。だがそのシェルにあってさえ、テュルギーの経済学の古典形成における貢献という肝心の点になると正当な評価を下すことができなかつた。テュルギー資本理論の形成の鍵を握るグルネーの経済思想や経済学説の全容を解き明かす資料をもたなかつたことがその主因であつた。それゆえ、テュルギーが 1759 年にグルネーが死してのちはフィジオクラート派に「改宗」し、結果として「グルネーを裏切つた」という“珍説”まで登場する始末であつた。

ところが、20 世紀末から今世紀初頭にかけて、シェルが生前目にするのなかつたグルネーに関する資料が、津田内匠やシモーヌ・メイソニエの手によって発見されたことともあいまって、グルネー、テュルギーの功績がようやく正当に評価されるに至つた。なかでもメイソニエが発見し編集・出版したサー・ジョサイア・チャイルの『交易論』の仏語訳とこれに関連するグルネーの「注釈」の完全な草稿の存在は、従来分りあつた「資本」概念の形成と成立の事情を解き明かすきっかけとなつたのである。メイソニエの業績は市場経済ないし資本主義経済の要素形態としての「資本」のみならず、「資本家」という用語の誕生の経緯を説き明かしたところに最大のポイントがあり、彼女はテュルギー自身がグルネーの「資本」および「資本家」を継承・発展させ、後年の『諸省察』のなかで体系的に考究されていることを資料的事実に基づき証明したのである。

はたしてそうであるとしても、テュルギーが 1776 年にデュボンに書き送つた書簡のなかで「わたしはこれらふたりの人間〔グルネーとケネー〕の弟子であつたこと生涯の誉れとするものである」とのべているように、テュルギーにおけるケネー学説の影響を排除するものではない。実際、テュルギーがケネーのいわゆる「純生産物」と「資本前貸し」——あるいは資本ストック——に負っていることは確かである。しかしだからといって、かれが「農業のみが生産部門」とするフィジオクラシーの狭隘かつ排他的な根本教義に与しなかつたこともまた明白である。むしろテュルギーが純生産物の産出を農業のみならず商工業にも認め、これを一般化したことは特記すべきであろう。テュルギーは「土地が生産にとっての唯一の制約条件」というカンティヨンの主張に同意したのであつて、そうした主張は「農業のみが生産部門」とするフィジオクラート派の根本教義とは決定的に異なる。

それだけではない。そもそも、テュルギーの資本理論は「貨幣的資本」に力点を置き、その所有者である「資本家」が「企業者」にその貨幣を貸し付ける、つぎに後者はこれを「前貸し」して資本ストックないし資財的資本に転化し、これを利潤とともに回収して再び貨幣的資本に転化する、という貨幣流通ないし資本の循環を考えているのに対して、ケネーにあっては資本をもつばら素材的な面に一面化してその機能を論じている。しかもここでは、アイルランド出身の国際的銀行家リシャール・カンティヨンやテュルギーの最も

重視した経済概念の一つである企業者——テュルゴーは『諸省察』のなかでこれをさらに発展させて「資本家的企業者」と名づけた——の富の形成と分配における積極的機能をほとんど論じていないのである。ケネーは土地耕作の規模の差異を論じたにすぎない。

このようにテュルゴーの資本理論はケネーのそれとは異なり、貨幣の積極的な役割を前提にしている点にその際立った特徴があるといつてよいのであるが、皮肉にも、このことはテュルゴーが生涯忌み嫌ったジョン・ローのそれと一面で共通する。ただ問題は、テュルゴーが資本理論によって貨幣の重要性を説き、資本の形成と蓄積、貨幣利子を論じながらも、これを結果として「修正」するかのような議論が認められるという点にある。しかも、かれは資本の蓄積過程における銀行や信用の役割——とくに信用創造機能——をまったく容認せず、資本の蓄積はこれをもっぱら企業者による内部蓄積したがってまた自己金融によって行うものと決めつけ、ために外部金融すなわち銀行による金融仲介・信用創造機能や株式や債券等の証券の発行を通ずる資金調達を「危険」なものと見做して否定したのである。これが結果として、ケネー流の経済理論を容認する根拠とされることになるのである。仮にそうであるとしても、テュルゴーがケネーの理論を継承・発展させたというよりはむしろ、カンティヨンの銀行・信用論を実質的に踏襲したとみるほうがより適切である。そしてこれをさらにつき詰めていうなら、テュルゴーの資本理論には、18世紀フランスの金融市場がネーデルラントやイングランドのそれに比較して狭隘かつ未発達であったという歴史的事情を背景として成立したことに加えて、ローの経済政策——ロー・システム——を否定するカンティヨンの影響が見え隠れするといっても過言ではない。

周知のように、テュルゴー自身はフランス・カトリックの総本山ソルボンヌ学寮・僧院に身を置く時代から、神学の研究のほか、社会的・政治的・文化的諸事象にも関心を抱き、かつそうした分野の研究論文をものす人物であったが、こと経済問題への強い関心は、かれが僧職者を目指していた1749年にシセ神父に送ったロー・システム（とくに紙幣発行を通じた信用創造）への批判を出発点としており、しかもテュルゴーのローとかれの経済学説——主要にはローの銀行論や信用創造論——への消極的ともいえる姿勢がのちにグルネーとの知遇を得て経済研究の手ほどきを受けても変わることがなかった。

この点についてさらに付言すれば、テュルゴーは銀行信用や金融市場に関する稿を起こすことを計画していたことを、かれが1748年ごろに作成したされる備忘録のリスト「著作作成計画」の中に見出すことができるが、日の目を見ることはなかった。それどころか、テュルゴーが財務総監の要職にあったおり、公立銀行——割引金庫の設立を容認するさい、かれの忌み嫌ったローの「呪いの言葉」である「銀行」ではなく、「金庫」と命名しさえしたのである。ところが、テュルゴーの資本理論やそれに関連する資本の形成と蓄積に対する銀行や信用の経済機能を消極化した銀行・信用理論ないし金融論が、19世紀の古典経済理論の中に深く根を下ろし、20世紀に至るまでその“ひな形”として受け継がれることになったのである。